

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月16日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008～2011

課題番号：20520625

研究課題名（和文） 「日書」よりみた地域文化と中国文明

研究課題名（英文） Local Cultures and a Chinese Civilization as seen from Rishu

研究代表者

工藤 元男（KUDO MOTOO）

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：60225167

研究成果の概要（和文）：

戦国楚の地域文化の一つとして発生した「日書」が、秦漢帝国を媒介にして、ある意味で普遍的な占ト文化として流通してゆく歴史的過程を明らかにした。またその過程で「日書」が前漢武帝期頃から弛緩・解体し始め、他の占書の中に組み込まれてゆく状況も明らかにした。このような「日書」の歴史的性格は、戦国晚期以降の郡県制の発達と連動するものであり、出張が多かった地方の郡県少吏にとって「日書」が必要不可欠な占いであったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

Based on my research, Rishu was firstly produced as a part of the local culture in the Chu during the Warring-States period. Later on, Rishu became a universal culture of divination during the Qin and Han dynasties. In a meanwhile, Rishu had dismantled from the period of the Han emperor Wu, and had been incorporated in other divination texts. This historical character of Rishu was connected with the development of the system of prefectures after the late Warring-States period, i. e., government officials in that age used Rishu as a guide book for official trips.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：史学・東洋史

科研費の分科・細目：3103

キーワード：

中国史 史料学 考古学 民俗学 宗教儀礼研究

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の出発としての睡虎地秦簡

報告者の研究は、湖北省雲夢県で発見された睡虎地秦簡の研究を起点とする。それは戦国

秦が長江流域の楚の国都を抜いて開置した南郡の官吏の墓葬から出土した。その中に戦国秦の法律条文や民間社会の占ト習俗を示す「日書」が含まれていた。報告者はこの両

種の資料を“社会史”の手法を導入することで“法と習俗”の視座から分析し、秦の法治主義が在地社会の習俗を考慮したものから、一元的支配に転換してゆくまでの歴史過程を検証し、その成果を『睡虎地秦簡よりみた秦代の国家と社会』（創文社、1998年）と刊行した。

（2）中国文明と地域文化－四川モデルの提起－

報告者は、この研究成果に基づき、秦の統一過程における法の一元化現象を、“中国文明と地域文化”という視座から検証した。すなわち2002年度に21世紀COEプログラムが公募されたとき、報告者はその申請書を作成するに当たって、中国西南の巴蜀地方がどのように秦国の領土に編入され、巴蜀文化が消えてゆくのかを“四川モデル”として提示し、それを他の諸地域において比較研究する方法を提起して採択された（アジア地域文化エンハンシング研究センター、拠点リーダーは大橋一章教授）。これは睡虎地秦簡による“法と習俗”の視座を、巴蜀の地を地域モデルとして検証する発展形であり、秦の統一過程および秦を継承した前漢の成立において、習俗に表象される地域文化がどのように消えてゆくのかという問題を、秦漢帝国のシステムから検証するものである。

（3）孔家坡漢簡「日書」の発見の意義

ここで再び睡虎地秦簡「日書」に戻ると、その中に占領者である秦の側の占トと、被統治者である楚の側の占トが併存している現象に注目される。一方、2000年に湖北省隨州市で前漢初期の孔家坡漢簡「日書」が発見された。その内容は占トの篇名も含めて睡虎地秦簡「日書」と酷似し、ただし睡虎地秦簡「日書」の中に併存していた楚的な占トがきれいに消失している。睡虎地秦簡「日書」から孔家坡漢簡「日書」へのこの過程は、戦国秦が

六国を征服して統一帝国を形成し、その秦が劉邦に倒されて前漢帝国が形成されてゆく過程と根底で関連する文化現象である。すなわち、秦漢帝国の成立によって、先秦社会で育まれてきた各地の地域文化は急速に消滅し、諸々の文化は秦漢的なものへ再編統一されてゆく。本研究は睡虎地秦簡から孔家坡漢簡「日書」への過程の占ト内容の比較分析を通じて、秦漢帝国における“秦化”・“漢化”の構造を明らかにしようとするものである。

（4）大学院教育改革支援プログラムとの関係

21世紀COEプログラムの終了後、早稲田大学大学院文学研究科ではCOEの事業推進担当者の主だった教員を組織して、大学院教育改革支援プログラム“アジア研究と地域文化学”を申請し、採択された。本プログラムでは博士後期課程に五つの特論ゼミを開講し、報告者は「漢化の構造」ゼミを担当した。本研究はこの「漢化の構造」ゼミを高度に推進してゆくための前提をなす基盤研究である。

2. 研究の目的

「日書」のテキスト研究を通じて、戦国楚において一地域文化として発生した「日書」が、秦による楚の征服を通じて秦に受け継がれ、秦を倒した前漢にも受け継がれ、その占ト習俗は漢の広範な地域に広がってゆく過程を明らかにする。それと同時に、秦漢帝国の成立は先秦の地域文化を消滅させたにも関わらず、地域文化を吸収してそれを全国的な文化として再編・展開させていった側面も明らかにする。

3. 研究の方法

当該研究は以下のテキスト研究に基づいて行われる。

（1）孔家坡漢簡「日書」の研究

睡虎地秦簡「日書」の研究はすでに平成

3・4年度科学研究費補助金（一般研究C）「雲夢秦簡「日書」の研究」（研究代表：工藤元男）において基本的に検討済みであるが、本研究はその成果を出発点としている。本研究で重点的に取り上げるテキストは、湖北省文物考古研究所・隨州市考古隊『隨州孔家坡漢墓簡牘』（文物出版社、2006年）である。そのテキスト研究によって、そこに展開されている占法原理や占辞の内容を睡虎地秦簡「日書」と比較研究する。

（2）周家台秦簡「日書」の研究

1993年に湖北省荊州市で発見された周家台30号秦墓出土の「日書」は、秦二世皇帝元年を下限とする六国統一後の秦の「日書」である。それは戦国晩期の睡虎地秦簡「日書」と前漢初期の孔家坡漢簡「日書」の間を繋ぐものであり、その資料的位置づけを行う。テキストは湖北省荊州市周梁玉橋遺址博物館編『關沮秦漢墓簡牘』（中華書局、2001年）である。

（3）「日書」の発生と展開の過程に関する研究

現存最古の「日書」は戦国晩期の楚の九店楚簡「日書」である。これより「日書」は楚の文化圏に淵源する民俗文化であることが想定される。この九店楚簡「日書」から睡虎地秦簡「日書」へのプロセスを明らかにする。テキストは湖北省文物考古研究所・北京大學中文系編『九店楚簡』（中華書局、2000年）である。

4. 研究成果

その研究成果は研究期間中に行われた個々の論文や学会発表を基礎にしてまとめた『占いと中国古代の社会—発掘された古文獻が語る—』（東方選書、1911年）として公刊した。それらによって検証されたことは、以下の通りである。

（1）戦国時代に楚の地域文化として発生

した「日書」は、それ以前の楚地で行われていた卜筮祭禱習俗の中から形成されたこと。九店楚簡「日書」は、その初期の段階の型を示している。

（2）「日書」の型が成立したのは睡虎地秦簡「日書」から窺える。それは前漢初期の孔家坡漢簡「日書」の篇の編成と酷似することから互証される。

（3）「日書」は戦国時代晩期に楚地で地域文化として生まれたが、その楚地を秦が占領してこの占卜文化を継承し、それは秦帝国・漢帝国へと継承されることで帝国という媒介によって拡大した。地域文化と中国文明の関係は、このような「日書」の展開の面から一つの側面として検証することができた。

（4）しかし前漢文帝・景帝の時代を頂点として、「日書」はその型を弛緩・解体させていったようである。

（5）当初予測したように、地域文化としての「日書」が秦漢帝国の成立によって消滅していくのではなく、それが帝国の発展過程に“乗って”中国各地に伝播して行くというのが、現実だったようだ。ただしそれが弛緩・解体した後、どのように地域文化として再編されて行くのかという問題については、前漢末の尹湾簡牘の中に含まれる諸占書の中に、「日書」の占辞が含まれていることから検証された。おそらく前漢武帝期以降に弛緩・解体して行く「日書」は、他の占書に組み入れられることによって再編され、その延長上に後世の占書『通書』などが形成されてくるのであろう。

（6）「日書」が戦国晩期に登場し、前漢の文帝・景帝期ごろまで発展し、武帝期ごろから弛緩・解体し始めるのは、それが郡県制の発展過程と重なり、この時期それに伴って地方官の公務出張が激化した。「日書」はそのような公務出張に駆られる郡県少吏によ

って必要不可欠な工具書だったのである。
「日書」を出土する墓葬の多くが、郡県少吏層のものであることは、それを傍証するものである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 14 件)

1. 工藤元男編「日本秦簡研究現状」(武漢大学簡帛研究中心主編『簡帛』第 6 輯、pp.139-192、上海古籍出版社、2011 年 11 月、査読有)
2. 工藤元男「秦対巴蜀的統治及其移民」(趙徳潤主編『炎帝文化研究』第 13 輯、pp.102-114、大象出版社、2011 年 7 月、査読有)
3. 工藤元男「中国文明と地域文化—日本における秦簡研究の現状—」(『ワセダアジアレビュー』no.9、pp.56-59、早稲田大学アジア研究機構、2011 年 2 月、査読無)
4. 工藤元男「フィールド歴史学と中国古代史」(工藤元男・李成市編『アジア学のすすめ』第 3 巻アジア歴史・思想論、pp.2-22 頁、弘文堂、2010 年 6 月、査読無)
5. 工藤元男「秦漢田律考—以与習俗的關聯為主—」(中国社会科学院歴史研究所・日本東方学会・大東文化大学編『中日学者中国古代史論壇文集』所収、pp.135-152、中国社会科学出版社、2010 年 4 月、査読無)
6. 工藤元男「秦国的巴蜀統治和法治・郡県制」(盧丁・工藤元男主編『四川民族歴史文化綜合研究—中国西部南北遊牧文化走廊研究報告之三—』所収、pp.260-273、重慶出版社、2010 年 3 月、査読無)
7. 工藤元男「中国古代の「日書」にみえる時間と占卜」(『メトロポリタン史学』第 5 号、pp.3-23、2009 年 12 月、査読無)
8. 工藤元男「中国文明と“四川モデル”」(『創文』no.516、pp.59-62、2009 年 1 月、

査読無)

9. 工藤元男「秦の巴蜀支配と移民」(『史滴』第 30 号、pp.7-24、2008 年 12 月、査読有)
10. 工藤元男「従九店楚簡《告武夷》篇看《日書》之成立」(武漢大学簡帛研究中心主編『簡帛』第 3 輯、pp.47-61、上海古籍出版社、2008 年 10 月、) 査読有)
11. 工藤元男「社会史研究与“卜筮祭祷簡”・“日書”」(佐竹靖彦主編『殷周秦漢史学的基本問題』所収、pp.147-165、中華書局、2008 年 9 月、査読無)
12. 工藤元男「平夜君楚簡“卜筮祭祷簡”初探—戦国楚的祭祀儀礼—」(『簡帛研究』2005、pp.253-268、広西師範大学出版社、2008 年 9 月、査読有)
13. 工藤元男「従地域文化論的觀點考察“楚文化”」(『珞珈講壇』第 4 輯、pp.88-102、武漢大学出版社、2008 年 6 月、査読無)
14. 工藤元男「「卜筮祭祷簡」から「日書」へ—九店楚簡《日書》の研究—」(『2007 年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書』所収、pp.53-61、財団法人 JFE21 世紀財団、2008 年 3 月、査読無)

[学会発表] (計 4 件)

1. 工藤元男「尹湾簡牘《元延二年日記》与占卜」(中国社会科学院歴史研究所・北京師範大学・香港理工大学聯合“第二届中国古文献与伝統文化”国際學術検討会、於北京師範大学、2011 年 10 月 15 日)
2. 工藤元男「秦漢田律考—以与習俗的關聯為主—」(第 1 回中日学者中国古代史論壇、2009 年 8 月 12 日、於中国社会科学院博源賓館)
3. 工藤元男「中国古代の法と社会—秦漢律の田律を中心に—」(第 5 回早稲田大学アジア研究機構シンポジウム「早稲田アジア学：確立への挑戦」、2009 年 5 月 23 日、於早稲

田大学国際会議場)

4. 工藤元男「中国古代の「日書」にみえる時間と占ト」(メトロポリタン史学会第5回大会シンポジウム「時の支配と時間意識」、2009年4月18日、於首都大学東京・南大沢キャンパス)

〔図書〕(計4件)

1. 工藤元男『占いと中国古代の社会—発掘された古文獻が語る—』(単著、東方選書42、東方書店、総頁279、2011年12月)

2. 工藤元男(廣瀬薫雄・曹峰訳)『睡虎地秦簡所見秦代国家与社会』(総429頁、上海古籍出版社、2010年11月)

3. 工藤元男・李成市著『アジア学のすすめ』第3巻アジア歴史・思想論(共編著、総312頁、弘文堂、2010年6月)

4. 工藤元男・李成市編『東アジア古代出土文字資料の研究』(共編、アジア研究機構叢書人文学篇第1巻、総頁362、雄山閣、2009年3月)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

工藤 元男(早稲田大学・文学学術院・教授)

研究者番号: 60225167

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: